

共に考える福島未来

浜通りの高校生がベラルーシ視察報告



子どもたちと交流する浜通りの高校生

東京電力福島第1原発事故に見舞われた福島県浜通りで学ぶ高校生による日本・ベラルーシ友好訪問団(NPO法人「ハッピーロードネット」主催)はこのほど、同県楢葉町で、今夏にチェルノブイリ原発事故地域を視察した報告会を開催した。参加者と共に両国の復興施策を比較しながら、福島未来に何が求められているのかを考えた。(東日本大震災取材班)



報告会終了後、記念写真を撮る参加者

日本・ベラルーシ友好訪問団の活動は、政府の「風評払拭・リスクコミュニケーション」強化戦略の一観点から重要で、高校生たちは海外を



浜田昌良 復興副大臣

(公明党)

視察するだけでなく、欠かせません。復興への道を歩む福島。特に、今も原発事故の現状を現地交流の中、影響を受ける被災地で伝えていると聞きま。浜通りで学んでいる風評払拭、理解促進に有効。正しい被災地の理解促進や誤った風評の払拭に向けては、まさまな機会を通して情報を発信することが

除染、賠償など日本と比較

「原発事故を経験した福島とベラルーシだが、復興への姿勢には大きな違いがある」。報告会で高校生たちは、視察で見聞きした内容を紹介するだけでなく、自らの考えや福島との比較を織り交せて発表した。

ある女子生徒は除染や原発の扱いについて、福島が汚染地域を元の状態に戻そうとしているのに対し、ベラルーシでは地図から51の村が消え、その地域は今も除染されていないと指摘。さらに、ベラルーシが経済を発展させる目的で来年、新しい原発を稼働する予定であることに触れ、「国が違えば原発に対する考えも違ってくる」と話した。

一方、原発被災者への賠償や健康支援策について発表した男子生徒は、日本よりもベラルーシの方が優遇

国による違い学び、視野広げる

「日本は賠償金を払って解決しようという姿勢に思えるが、ベラルーシには事故から30年以上たった今も被災地を長い目でケアする姿勢を感じた」。この男子生徒は、その一例として、被災地の子どもを数週間受け入れる国立保養施設「ブラレスカ」を挙げた。同施設は敷地内に宿泊、医療、娯楽施設などを備え、保養しながら勉強することが可能。それらを踏まえ、「被災者に寄り添っていい、良いと思った」と結んだ。

発表後には、生徒らの考えを層深めるため、立命館大学の開沼博准教授をコーディネーターに据え、「(震災)記憶の継承」「(福島に必要な)リーダーシップ」をテーマにパネルディスカッションを開催。生徒らは「震災当時の状況を伝える施設は、地震の揺れや避難生活を追体験できずなものにしてはどうか」「復興を担う指導者には、信念や柔軟性、計画を立てし成し遂げる力が必須だ」など意見を交わした。

報告会には、ベラルーシ人大学生も参加し、チェルノブイリ原発事故後の被災者の生活状況を調べた結果を発表。終了後、ハッピーロードネットの西本由美子理事長は「どうやって子どもたちに復興に向けた未来の遺産をつくるか。今後も行政や民間と考えていきたい」と語っていた。